

英語における嵌入子音の生起に関する一考察

— dreamt [drem^{Pt}] の分析を中心に —

犬塚 博彦*

(2002年9月30日受理)

1. はじめに

言語音が実際の発話において現われる場合、ある一つの音声だけが単独で発せられるということは現実にはほとんどなく、普通は他の音と結合して音の連続体として発せられる。ある音から別の音へとその調音の構えを移行させていく時、調音上のタイミングのわずかなずれなどが要因となって語の中の本来なかった位置に別の音が入り込むことがある。これを嵌入音 (intrusive) もしくは発芽音 (sprout sound) という。嵌入音の生起に関しては、共時面および通時面の両者からの考察が可能である。すなわち、共時面から見ればこれは純粋に音声学の領域に属するものであって、調音上の生理的なメカニズムをその要因とするさまざまな現象が個々の単語レベルで反映されたものであり、しかも散発的に現われるというところにその特徴がある。dreamt [drem^{Pt}] における [p] 音の嵌入がその一例である。また通時面から見れば、これは史的音韻論の領域に属するものであり、非語源的な音の添加 (addition) と位置づけられる。ME の *glimse(n)* が現代英語の *glimpse* に至る過程で生じた /p/ 音が史的变化における添加の一例である。

またこれとは別に純粋に音声的な現象として、英語において語末に3子音が連続する場合、中間の第二音が脱落し発音されないことがしばしばある。これは、*glimpse* における [p] 音や *lends* における [d] 音の脱落にその例が見られるのであるが、これは語末に3子音が連続した場合の発音のしにくさを回避するために生じた現象であると言える。

ある音連鎖における調音のしくみを共時および通時の両面からとらえた場合、嵌入・添加は語における音の数が結果として増加する現象であり、一方、脱落はそれとは逆に音の数の減少に関わるものである。本論考では、英語において鼻子音 (nasal consonant) [m] [n] [ŋ] に口子音 (oral consonant) が後続する音声環境を取りあげて、第一音と第二音の間に嵌入子音が生じる際のしくみについて分析するとともに、語末に3子音が連続した際の発音で第二音がしばしば脱落する現象をも視野にいれながら、英語の音構造の性質について考察していくことにする。

* 岩手大学教育学部

2. 事例の概要

2.1 嵌入子音が生じる際の音声環境

英語において鼻子音 ([m] [n] [ŋ]) の後に口子音が続き、調音の際に両者の間に嵌入子音の存在が認められる場合、その時に生じ得る嵌入子音は第一音と同じ調音位置をもつ閉鎖音であり、その閉鎖音が無声か有声かという点については第二音とその性質を共有するものとなる。すなわち、第一音が両唇鼻音 [m] の時、それに続く第二音が無声子音であれば無声両唇閉鎖音 [p]、有声子音であれば有声両唇閉鎖音 [b] が嵌入音として生起する。一方、第一音が歯茎鼻音 [n] の時、後続の第二音が無声子音であれば無声歯茎閉鎖音 [t]、有声子音であれば有声歯茎閉鎖音 [d] が生じる。また、第一音が軟口蓋鼻音 [ŋ] の時、その後続く第二音が無声子音であれば無声軟口蓋閉鎖音 [k]、有声子音であれば有声軟口蓋閉鎖音 [g] が嵌入音として生起する。またこの他にも、第一音が側音 [l] でその後無声子音 ([s, ʃ, θ]) が続く場合にも側音 [l] と同じ調音位置でかつ後続の子音とその性質が無声であるという点において共通する無声歯茎閉鎖音 [t] が嵌入音として認められることがある。

では以下に、英語において嵌入子音が生じる際の事例をそれぞれの音声環境ごとに共時面および通時面から概観することにした。なお、この章で取りあげる言語資料は、安井 (1992)、竹林 (1996)、寺澤他 (1997)、Kenyon (1969) および Kenyon and Knott (1953) に拠るものとし、またその際、共時面からの言語資料に付記する発音記号については、嵌入音を含んだ時の音形を簡略表記で記すことにする。精密表記を使わなかったのは、本論考における議論の中で一般の英語辞典の発音表記を引用する必要性があったことから、表記上の整合性を保つための措置である。参照した英語辞典は、*Longman Pronunciation Dictionary* (1990) [以下 *LPD* と略記] および *Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary* (1994) [机上版および CD-ROM 版、以下 *RHD* と略記] である。

2.2 嵌入子音 [p]

嵌入子音として [p] 音が認められる場合の音声環境は、鼻子音 [m] の後に無声子音 ([t, k, f, θ, s, ʃ]) が続く場合であり、共時面および通時面からの例を以下に示す。

- (1) 音声環境：[m] + [p] + 無声子音 ([t, k, f, θ, s, ʃ])

共時面：/mf/ → [m^pf] comfort [kʌm^pfərt] (cf. [kʌmfərt])

/mθ/ → [m^pθ] something [sʌm^pθɪŋ], warmth [wɔ:rm^pθ]

/mt/ → [m^pt] dreamt [drem^pt] (*LPD*には[p]音つきの[drem^pt]の表記あり)

通時面：empty < ME empti < OE æm(et)tig

glimpse < ME glimse(n) < OE *glimsian (-p-音の添加は16世紀から)

このうち、dreamtについては*LPD*には[drem^pt]のごとくすでに嵌入子音を含めた形でその発音が表記されていることから、dreamtを調音する際に嵌入される[p]音はかなりの程度その存在が「認知」され定着しているものと考えられる。これは嵌入によって語全体として音の数が増える例であるが、またその一方で、竹林 (1996:318)にあるように、もともと/p/音を

その中間に含む語末の /mpt/ 音連鎖については、第二音の /p/ 音が脱落されやすいことも報告されており（例：tempt における /p/ 音）、その場合は結果として [mt] なる音連鎖が生ずることになる。

また、glimpse という語は、史的に遡ると ME では glimse(n) という語形であって、16 世紀に /p/ 音が添加され今日に至っている。ところで、現代英語における glimpse は語末が /mps/ という 3 子音連続で終わっているため、中間の第二音の /p/ が脱落して [glims] と発音されることがしばしばあるという（竹林 1996:318）。これはももとの第一音 /m/ と第二音 /p/ 音の調音位置が同じであることから、完全同化（complete assimilation）が生じ、/mp/ > *[m^m] > [m] なる音過程を経て /p/ 音が脱落したものと解釈することができる。同一の語において通時および共時の両面からとらえた場合に、添加と脱落の両方が見られるというのは興味深いことである。これら [p] 音の嵌入もしくは脱落をめぐる諸問題については英語における子音連鎖の適格性の観点から後で考察することにしたい。

また上記 (1) における comfort については、安井 (1992:96) および竹林 (1996:346) では嵌入音 [p] を含む [kʌmpfɔrt] が例としてあげられているが、これとは別に、/mf/ の音連鎖については竹林 (1996:347) にある nymph [nɪmf] の例に見られるように、[m] 音において調音位置に関する逆行同化が生じて [kʌmfɔrt] と発音される場合もまた多いものと考えられる。こちらの場合、第一音 /m/ が両唇音、第二音 /f/ が唇歯音であって両者のももとの調音位置も異なり、完全同化には至らず、そのため音が脱落してその数が減少するという段階にまでは至っていない例であると同らえることができる。

2.3 嵌入子音 [b]

嵌入子音として [b] 音が認められる場合の音声環境は、鼻子音 [m] の後に有声（子）音 ([l, r, ər]) が続く場合であり、通時面からの例を以下に示す。

(2) 音声環境：[m] + [b] + 有声(子)音([l, r, ər])

通時面：thimble < ME thimel < OE þymel

nimble < ME nymel, nemel < OE numol, næmel

humble < ME (h)umble < OF (h)umble, humele < Lat humilem, humilis

slumber < ME slombere(n), slum(b)ere(n), slume(n) < OE slūma

2.4 嵌入子音 [t]

嵌入子音として [t] 音が認められる場合の音声環境は、鼻子音 [n] もしくは側音 [l] の後ろに無声子音 ([s, ʃ, θ]) が続く場合であり、共時面からの例を以下に示す。

(3) 音声環境：[n] + [t] + 無声子音 ([s, ʃ, θ])

共時面：/ns/ → [n^ts]

sense [sen^ts], fence [fen^ts], answer [æn^tsər], prince [prɪn^ts]

/nʃ/ → [n^tʃ]

mention [men^tfən], intention [inten^tfən]

/nθ/→[n^hθ]

ninth [nain^hθ], tenth [ten^hθ], month [mʌn^hθ]

音声環境：[l] + [t] + 無声子音([s, ʃ, θ])

共時面：/ls/→[l^hs]

else [el^hs] (*RHD* には [els] と並んで [elts] 表記もあり)

/lʃ/→[l^hʃ]

Welsh [wel^hʃ] (*RHD* には [welʃ] と並んで [weltʃ] 表記もあり)

上記 /ns/, /nʃ/, /nθ/ の音連鎖においては、第一音 /n/ は歯茎鼻音であって後続の摩擦音 /s/, /ʃ/, /θ/ にその調音の構えを移行する際に、上の歯茎に接触していた舌先が離れるよりもさきに軟口蓋後部と口蓋垂が上がり鼻腔への通路がふさがれた場合に [t] 音が嵌入しその結果として破擦音の響きを伴った発音となることを示しており、これは実際の発音においてよく見られる現象である。

2.5 嵌入子音 [d]

嵌入子音として [d] 音が認められる場合の音声環境は、鼻子音 [n] の後ろに有声音が続く場合であり、共時面および通時面からの例を以下に示す。

(4) 共時面：/nz/→[n^dz]

lens [len^dz], jeans [dʒi:n^dz]

通時面：thunder < OE þunor

spindle < OE spinel

kindred < ME kinrede < LateOE cynrēd(e)

共時面の例としてあげた音連鎖 /nz/ において [d] 音が嵌入して [n^dz] となる現象については、竹林 (1996:330) および Kreidler (1989) によると、上記 (3) に見たような音連鎖 /ns/ における [t] 音の嵌入の場合ほどあまり多くは行なわれないという。[d] 音の嵌入というよりむしろそれとは逆の現象として、もともとその中間に /d/ 音を含む /ndz/ なる語末の3子音の音連鎖において、第二音の /d/ 音が脱落し [nz] と発音する人がいるということが報告されている。/ndz/→[nz] の例として、lends および finds があげられており、[d] 音が脱落した場合には表面上それぞれ lens および fines と同じ発音になる。

2.6 嵌入子音 [k]

嵌入子音として [k] 音が認められる場合の音声環境は、鼻子音 [ŋ] の後ろに無声子音が続く場合であり、共時面からの例を以下に示す。なお、この項で取りあげる語については、その説明の都合上、音節の区切りをあわせて記すことにする。

(5) 共時面：/ŋs/→[ŋ^ks]

a·mongst [əməŋ^kst] (*RHD* には [əməŋst] と並んで [əməŋkst] 表記もあり)

young·ster [jʌŋ^kstər] (*RHD* には [jʌŋstər] 表記のみ)

/ŋθ/ → [ŋ^kθ]

length [leŋ^kθ] (*RHD* には [k] 音を含む [leŋ^kθ] と並んで [lenθ] 表記もあり)

strength [streŋ^kθ] (*RHD* には [k] 音を含む音形で [streŋkθ] と表記)

なお、ここで興味深いのは、/ŋs/ および /ŋθ/ の音連鎖については、*RHD* においてすでに嵌入音 [k] を含む音形で発音が表記されているものがいくつか見られることから、この音声環境においては [p] [t] 音の場合よりも嵌入音が生起しやすいということが、辞書におけるその発音表記の上からもわかる。このあたりの事情を少し詳しく観察してみることにする。

まず、/ŋs/ の音連鎖についてであるが、*RHD* において [k] 音を嵌入した音形で表記されている語は、上記 a·mongst [əməŋkst] (*RHD* には [əməŋst] の併記もあり) の他に angst [æŋkst] (ドイツ語 Angst 「不安」からの借入語) がある。一方、この音連鎖を含む語は他に young·ster [jʌŋstər], gang·ster [gæŋstər], ring·ster [rɪŋstər] があるが *RHD* には [k] 音の嵌入は記されていない。前者のグループは /ŋs/ の音連鎖が同じ音節の中に含まれしかもその音節が語末に来るという点で共通性が見られるのに対し、後者のグループは /ŋs/ の音連鎖が語中に位置し、しかもそれが2つの音節にまたがっている (つまり /ŋ/+ /s/) という点で共通性がある。*RHD* においては、angst [æŋkst] のように英語としてはそれほど使用頻度が高くないと思われる語に [k] 音の嵌入が表記されているのに対し、young·ster [jʌŋstər] のような英語の母語話者にとっては比較的なじみがあると思われる語に [k] 音の嵌入が表記されていないことから、当該の音連鎖が同一音節内にあるか、あるいは音節の境界を越えて隣接の音節にまたがっているかの違いが、嵌入音の生起の有無に影響を及ぼしているものと考えられる。

次に /ŋθ/ の音連鎖についてであるが、*RHD* には上記 length, strength に加えて使用頻度としてはそれほど高くはないと思われる some·thingth (「いく度目かの、何番目かの」) なる語が収録されている。いずれも語末が “-ngth” で終わるという点では共通しているが、*RHD* では length [leŋkθ] および strength [streŋkθ] には [k] 音が嵌入された音形が表記されているのに対し、some·thingth [sʌmθɪŋθ] についてはそれが見られない。前二者が1音節、後者が2音節という音節数の違いはあるものの、当該の音連鎖 /ŋθ/ は語末で同一音節内にあるため音声環境としてはともに同じであることから、同一の音声環境であっても語の使用頻度やその他何らかの心理的要因によって、嵌入音が生起するかどうかについてのその認知度に差が見られるということが、辞書の発音表記の上からも読み取ることができる。

なお、length および strength の動詞形 (length·en および strength·en) における音連鎖 /ŋθ/ については、*RHD* ではそれぞれ [leŋkθən] および [streŋkθən] に見られるごとく嵌入音 [k] を含む表記になっている。これは /ŋθ/ 音連鎖が語中に位置するという点では上記 /ŋs/ の分析の際に触れた young·ster [jʌŋstər] の例に表面上類似しているが、length·en および strength·en の場合は、/ŋθ/ の音連鎖が同一音節内であって、二つの音節にまたがるものではないために、嵌入音が生起することになると考えることができる。

3. 挿入子音が生じるメカニズムについての考察

3.1 分析の視点

前章においては、英語における鼻子音 ([m] [n] [ŋ]) とそれに後続する口子音との間に生じる挿入子音の生起について、音声環境ごとにそのしくみを概観した。その際、類似の音声環境において挿入音生起の分布に違いが見られる事例については、当該の音連鎖が同一音節内にあるか、あるいは音節の境界を越えて隣接の音節にまたがっているかの違いにその根拠を求めた。本章においては、dreamt という語を例にして、語末の /mt/ 音連鎖において挿入音が生じる場合はなぜ [p] 音となるのか、そしてまた子音が挿入するということは別に調音上どのようなことが可能性として起こり得るのかという点について、英語における子音連続としての適格性の観点から分析を試みることにする。

ここでは手順としては、まず初めに、子音を分類する時の3つの基準 (①声の有無, ②調音位置, ③調音様式) に基づいて、第一音 /m/ から第二音 /t/ へ至る過程において調音上のタイミングのわずかなずれからその移行段階において生ずる可能性のある音の候補をすべて抽出し、それぞれについて英語の音連鎖としての適格性を吟味することにする。そして次に、可能性のある候補として抽出された挿入子音を含む音連鎖が英語の実際の音構造に適うものである場合に、挿入子音が生ずる過程そのものの中に英語の音構造の特質が何か見出し出せるものなのかどうかという点を考察していくことにする。

3.2 dreamt [drempt] の分析

まず dreamt という語についてであるが、分析に先立ってその語形を音韻史的に概観しておくことにする。動詞 dream は OE では *drȳman*, *drieman*, ME においては *dreme(n)* という語形が見られる。中尾 (1985:382) によると、11世紀末から12世紀にかけて鼻音の後の /d/ 音が /t/ 音へと無声化する現象が集中的に見られ、*dreme(n)* においてもその過去形については *dremed* > *dremt* なる変化が生じ、それが現代英語の dreamt へと受け継がれている。

ところで現代英語では dreamt のように語末に /mt/ なる子音連続が現われる語はその例が極めて少ない。RHD で収録語彙を調べたところ、現代英語では dreamt およびその関連語の undreamt, それに若干の外来語 (amt 「(デンマークの) 行政区画, 県」) 以外には見られなかった。このことから現代英語の母語話者にとっては、それが実際にそのまま [mt] 音として発せられるかどうかという点は別にして、語末の位置にくる /mt/ 音連鎖そのものが「英語らしくない」配列であると認識されているものと推定される。竹林 (1996:312) には、英語における語末の位置に現われる子音群の一覧表が載っているが、/mt/ 音連鎖はそのリストにあげられていないことからそれが裏づけられる。(因みにドイツ語には上に例としてあげた語と同じ綴り字の Amt 「役所, 官職」や (er) kommt 「(彼は) 来る」や (er) bekommt 「(彼は) 受け取る」などがあり、語末の /mt/ 音連鎖はごく普通に見られるものである)。

では dreamt において語末の音連鎖 /mt/ に [p] 音が挿入される場合の分析にはいっていくことにする。第一音の [m] は有声・両唇・鼻 (閉鎖) 音であり、第二音の [t] は無声・歯茎・(口) 閉鎖音である。第一音から第二音へその調音の構えを移していく際に、声の有無に関しては、声帯が振動している状態 (=有声) から振動しない状態 (=無声) へと変化する。調音位

置については、唇が上下閉じた状態からその閉鎖が開放され、一方ではまた舌先が上の歯茎に向けて移動しそして接する構えへと移行する。調音様式については、軟口蓋後部および口蓋垂が下がっていて呼気が口腔と鼻腔の両方へ通じている状態(=鼻音)から、軟口蓋後部および口蓋垂が上がり鼻腔への通路がふさがれる状態(=口音)へと変化する。これら3つの要因つまり(1)声帯の状態、(2)調音位置、(3)調音様式が、観念上は同時にしかも全く時を入れずに切り替わるのが理想ではあるが、時間および空間を伴うこの現象の世界の中で、ある時、ある場所で、ある人によってなされる一回ごとに微妙に異なるその調音運動においては、それは適うことではなく、調音上のタイミングのわずかなずれが非意図的に生ずる可能性がある。それゆえ、この3つの要因がそれぞれ切り替わる前と後を考慮に入れると、調音の構えを移していく際にその調音上のタイミングのずれから潜在的に生じる可能性があると思われる中間的な状態が全部で6通りあることがわかる。それぞれの調音上の組み合わせとそれによって可能性として生じ得る子音連続を以下に示す。

(6) 語末の /mt/ 音に嵌入し得る音の候補の可能性

第一音 [m]	= [有聲][両唇][鼻(閉鎖)音]												
(移行段階での可能性)	<table border="0" style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black;"> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[1] = [無聲][両唇][(口)閉鎖音] → [p]</td> <td style="padding-left: 20px;">[m^{pt}]</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[2] = [有聲][両唇][(口)閉鎖音] → [b]</td> <td style="padding-left: 20px;">*[m^{bt}]</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[3] = [有聲][歯茎][(口)閉鎖音] → [d]</td> <td style="padding-left: 20px;">*[m^{dt}]</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[4] = [無聲][両唇][鼻(閉鎖)音] → [m]の無声化音</td> <td style="padding-left: 20px;">[m^{mt}] > [mt]</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[5] = [無聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]の無声化音</td> <td style="padding-left: 20px;">*[m^{nt}]</td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 10px;">[6] = [有聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]</td> <td style="padding-left: 20px;">*[m^{nt}]</td> </tr> </table>	[1] = [無聲][両唇][(口)閉鎖音] → [p]	[m ^{pt}]	[2] = [有聲][両唇][(口)閉鎖音] → [b]	*[m ^{bt}]	[3] = [有聲][歯茎][(口)閉鎖音] → [d]	*[m ^{dt}]	[4] = [無聲][両唇][鼻(閉鎖)音] → [m]の無声化音	[m ^{mt}] > [mt]	[5] = [無聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]の無声化音	*[m ^{nt}]	[6] = [有聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]	*[m ^{nt}]
[1] = [無聲][両唇][(口)閉鎖音] → [p]	[m ^{pt}]												
[2] = [有聲][両唇][(口)閉鎖音] → [b]	*[m ^{bt}]												
[3] = [有聲][歯茎][(口)閉鎖音] → [d]	*[m ^{dt}]												
[4] = [無聲][両唇][鼻(閉鎖)音] → [m]の無声化音	[m ^{mt}] > [mt]												
[5] = [無聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]の無声化音	*[m ^{nt}]												
[6] = [有聲][歯茎][鼻(閉鎖)音] → [n]	*[m ^{nt}]												
第二音 [t]	= [無聲][歯茎][(口)閉鎖音]												

上記6通りの状態のうち、[1] ~ [3] は鼻腔への通路がふさがれて鼻音性が解消され口音が生成された状態であることを示している。このうち [1] は、調音位置はそのまま鼻音性が解消され、かつ声帯にその状態の変化が加わり、有聲から無聲へと変化した状態を示している。[2] は鼻音性のみが解消され、声帯の状態と調音位置については両者ともに第一音の構えをそのまま保っているものであることを示している。[3] は声帯の状態はそのまま鼻音性が解消され、かつ調音位置の移動が生じたものであることを示している。また、[4] ~ [6] は鼻音性を維持したまま、声帯の状態と調音位置のいずれか一方あるいはその両者の変化を伴う場合の候補群である。このうち [4] は鼻音性と調音位置はそのまま声帯の状態のみに変化が生じたと想定したときの候補である。[5] は鼻音性のみがそのまま維持され、声帯の状態と調音位置に変化が加わったケースを想定した候補である。そして [6] は鼻音性と声帯の状態はそのまま、調音位置にのみ変化が生じた場合の候補である。

以上 [1] ~ [6] において調音上の中間的な状態として理屈の上では生じる可能性があると考えられる候補の中で、実際の発話において英語の語末子音連続の型として認められるのは [1] の [m^{pt}] である。語末の [m^{pt}] の型が英語において適格であると実際に認識されているという事実は、tempt ははじめ attempt, contempt, prompt といった語末に /mpt/ 音の子音連続を伴う語が他にも存在することからもわかる(因みに tempt の語形を遡ると, ME tempte(n) < OF tempter < Lat temptāre)。また [1] 以外の候補では、[4] の [m^{mt}] > [mt]

が、語末の /mt/ 音を注意深く発音した時のバリエーションのひとつとして生じる可能性があると思われる。それ以外の候補については、個々の発話における調音運動の中で仮にその場限りの一回的な音声現象として生じることはあったとしても、英語の母語話者および聴者にとってはそれが言語音として確かに有るということが認識され得ない状態にあると考えられる。では何故に [1] あるいは [4] が選ばれ、それ以外の候補が選ばれ得ないのかについて、/mt/ における実際の聴覚調音運動のメカニズムをもう少し細かく見ることによって考えていきたい。

まず、上記 [1] と [4] については、声の有無および調音位置に関して共に無声・両唇という性質を共有しており、異なっているのは調音様式のみである。このうち、第一音 /m/ から第二音 /t/ へ移行する過程で、鼻音性が早めに解消すれば [1] の [m^ht] 音が生じることになり、これに対し鼻音性が解消されるタイミングが [1] よりも遅ければ [m] の無声化音を内に含む [4] の [m^ht] 音を経て [mt] 音が生じることになる。両者の関係を鼻音性が解消するタイミングの違いというまさに同じ一つの観点において説明することができるのである。

では個別に、[1] の /mt/ → [m^ht] となる現象から考察していくことにする。語末の子音連続 /mt/ において、第一音と第二音の聴覚上の最も顕著な違いは鼻音性の有無であることから、鼻音性の解消ということが最も重要度の高い調音運動として位置づけられる。第一音 /m/ において唇がまだ上下閉じている構えの時に、軟口蓋後部と口蓋垂が上がり鼻腔へ通じる通路がふさがれると、呼気による口腔内の圧力が上がる。そして第二音 /t/ の構えである上の歯茎に舌先を移動させるべく両唇の閉鎖を解こうとするまさにその瞬間、破裂音の [p] 音が生じることになる。この過程においては、鼻音性の解消という調音様式の状態変化のほうが、調音位置の移動よりも優先していることがわかる。結果として生じる [m^ht] 音は、英語における語末の子音連鎖としても適格であるということは前にみた通りである。

次に [4] の /mt/ → [m^ht] (> [mt]) となる可能性について考えてみたい。鼻子音の調音運動は、城生 (1988:67) にあるように「瞬間的に達成されるような性質のものではなく、言わば『助走』をつけてピークに達し、さらにその後も尾を引きながら徐々に終息へと向かう」性質がある。これは鼻音性が保持されたままの状態の後続音へとその構えを移していく性質があることを含意している。これを /mt/ 音連鎖における調音運動についてあてはめてみると、[m] 音の調音において、唇を上下閉じかつ軟口蓋後部と口蓋垂を下げたままの状態を開いたままの状態、声帯の振動を停止させるとともに、(唇を閉じたまま) 舌先を上歯茎へと移動させ、その間軟口蓋後部と口蓋垂を上げて鼻腔への通路を塞ぎ、かつ両唇の閉鎖を解くという一連の調音運動が行なわれ、結果として [t] 音が生じることになる。ここでは鼻音性の解消という調音様式の状態変化が一時的にペンディングされている状態の中で、声の有無に関する声帯の状態変化のほうが調音位置の移動よりも優先して行なわれることになる。さきに見たように /mt/ 音連鎖は、英語における語末の位置の子音群としてはその適格性は認められないが、その一方で調音上の一つの現象として [mt] 音として生ずる可能性があるということがここにおいて示されることになる。

ここまでの議論の中で調音上の優先順位についてたびたび触れてきたが、ここで内容を整理しておくことにする。まず [1] における分析を通して明らかになったことは、調音様式の状態変化が調音位置の移動よりも優先されるということであり、一方 [4] における分析を通して明らかになったことは、声帯の状態変化のほうが調音位置の移動よりも優先されるということである。両者の共通点は、調音位置の移動に関する優先度が相対的に低いということである。そ

の根拠は、調音位置の移動という観点からみると、/mt/ 音連鎖においては、両唇の閉鎖を解くという運動と、舌先を上歯茎に移動して接触させ閉鎖をつくるという運動の2つを内を含むものであって、さきに見た声帯の状態変化や調音様式の状態変化に比べて複雑であることに求められる。このことから嵌入音の生起に関する可能性としてあげた候補のうち、調音位置の移動が関わってくる [3] [5] [6] は相対的に起こりにくい候補であると言える。

4. 結 語

以上、dreamt の例に見られる語末の /mt/ 音連鎖について、英語における子音連鎖の適格性という観点と聴覚調音運動の両観点から分析することにより、嵌入音が生じる場合の候補として [m^ht] および [m^ht] (> [mt]) がその可能性として高くなるのはなぜかという点についてのメカニズムを考察してきた。ところで音の嵌入という現象は、前にも触れたように、語における音の数が結果として増える現象であり、これとは逆に、音が減るケースが脱落であった。脱落については、語末の /mpt/ 音連鎖における第二音の /p/ 音が脱落されやすいことはさきにも触れたとおりである (例: tempt における /p/ 音)。この例に見られる脱落は、第一音 /m/ から第二音 /p/ へとその調音の構えを移行する際、ともに両唇音であることから、両唇性を保ったままの状態、第一音 /m/ における鼻音性が第二音 /p/ の位置にまで及ぶ一方で、声帯の状態については後続音の構えの準備をすべくその振動を停止することにより、[m] 音の無声化した状態が中間的に生じ、その結果全体としては /mpt/ 音連鎖が [m^ht] の段階を経て音声上の現象として [mt] 音として発せられることになると解釈できる。

以上本稿において考察した嵌入に関わる /mt/ 音および脱落に関わる /mpt/ 音連鎖について、その音過程をまとめると以下ようになる。

(7)	《嵌入》	《脱落》	(例)
(i)	候補[1]: /mt/ → [m ^h t]		dreamt /dremt/ → [drem ^h t]
(ii)	候補[4]: /mt/ → [m ^h t] → [mt]		dreamt /dremt/ → [dremt]
(iii)		/mpt/ → [m ^h t] → [mt]	tempt /tempt/ → [temt]

(7) における嵌入および音脱落の現象はいずれも、/m/ の鼻音性が後続音の調音に際してどこまでその影響を及ぼすかという観点と、鼻音性が解消するタイミングの違いという2つの観点から、同一座標軸において論ずることができる。このうち、嵌入については、本稿において考察したように、調音上のタイミングのわずかなずれがその要因となるのであるが、英語における語末の子音連続の適格性が優先される一方で ([drem^ht] の例)、適格性の度合いからは優先度が落ちるが調音上の一つの現象として [dremt] なる音形も可能であることを見た。一方、脱落については、英語における語末の3子音連続の発音のしにくさを回避するために、もともと音配列としては適格であった語末の /mpt/ 音連鎖 (/tempt/ の例) が調音上の一つの現象として適格性の優先度が相対的に下がる [mt] 音として現われることがあることを見た ([temt] の例)。本稿において考察した嵌入および脱落の際の音過程において生じ得る音連鎖は、いずれも (6) にあげた候補の中に含まれるものであり、時間および空間を伴うこの現象の世界の中で、ある時、ある場所で、ある人によってなされる調音運動は、一回ごとに微妙に異なるもの

ではあるが、その調音上の「揺れ」は、ある一つの枠のなかを動いているものであると言うことができる。

参考文献

- 大石強 (1988) 『形態論』, 開拓社, 東京.
 神山孝夫 (1995) 『日欧比較音声学入門』, 鳳書房, 東京.
 亀井孝他 (1996) 『言語学大辞典第6巻術語編』, 三省堂, 東京.
 高津春繁 (1950) 『比較言語学』, 岩波書店, 東京.
 高津春繁 (1957) 『言語学概論』, 有精堂, 東京.
 シュービゲル, M (1973) 『音声学入門』, 大修館書店, 東京.
 城生佰太郎 (1988) 『音声学』, アポロン, 東京.
 竹林滋 (1996) 『英語音声学』, 研究社, 東京.
 寺澤芳雄他 (1997) 『英語語源辞典』, 研究社, 東京.
 中尾俊夫 (1985) 『音韻史』 (英語学大系 11), 大修館書店, 東京.
 安井泉 (1992) 『音声学』, 開拓社, 東京.
 Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Blackwell, Oxford.
 Kenyon, J. S. (1969) *American Pronunciation*, George Wahr, Ann Arbor.
 Kenyon, J. S. and T. A. Knott (1953) *A Pronouncing Dictionary of American English*, Merriam, Springfield.
 Kreidler, C. W. (1989) *The Pronunciation of English*, Basil Blackwell, Oxford.
 Trask, R. L. (1996) *A Dictionary of Phonetics and Phonology*, Routledge, London.